

お薬のしおり

ロタウイルス胃腸炎について No.121 (H24.3)

東京医科大学病院 薬剤部

赤ちゃんは免疫^{めんえきりょく}力がまだ弱く、胃や腸も未発達です。そのため、感染性胃腸炎によくかかります。なかでも小さな赤ちゃんがかかりやすく、毎年冬から早春にかけて流行がみられるのが、ロタウイルス胃腸炎です。5歳までに、ほぼ100%の子どもが一度は経験すると言われています。リスクが最も高いのは、お母さんからの免疫がなくなる3~6か月頃で、特に注意が必要です。また、一度かかっても、繰り返しかかってしまうこともあります。

ロタウイルスは感染力が強く、衛生状態に気をつけていても予防が難しいため、先進国でも新興国でも感染率に差はありません。何度か感染すると免疫^{めんえき}がついて、胃腸炎の症状は軽くなりますが、赤ちゃんが初めて感染すると激しい下痢やおう吐などの症状を伴い、看病する家族にも大きな負担がかかります。ロタウイルス胃腸炎の症状は、突然の激しいおう吐と米のとぎ汁のような水様性の下痢を繰り返すのが特徴で、発熱を伴うこともあります。さらに、下痢やおう吐のため脱水^{だっすい}が進行したり、けいれんや意識障害がみられたりした場合、入院が必要になることもあります。また、ロタウイルスは脳炎・脳症の原因にもなり、脳炎・脳症になると後遺症^{こういしょう}が残ったり、死亡したりすることもあります。治療は、軽症であれば水分補給や食事療法で回復しますが、重度の脱水^{だっすい}に対しては点滴をして、体液のバランスを整えます。

このように、ロタウイルス胃腸炎にかかると負担が大きいのですが、ロタウイルス胃腸炎を予防するワクチンが、世界120か国以上ですでに認可されています。2011年7月、日本でもようやく承認され、11月に発売となりました。入院を必要とするような重症なロタウイルス胃腸炎は、ワクチン接種によってそのほとんどを防ぐことができると考えられてい



ます。

一方、安全性について心配な方もいるかもしれません。このワクチンも他のワクチンと同様に、接種後に何らかの副反応があわれることがまれにあります。また、体質や体調によっては接種できない場合もあります。しかし、ワクチンを受けないでその病気にかかる確率の方がはるかに高いことから、WHO（世界保健機関）では、ワクチンによるロタウイルス胃腸炎の予防を奨励^{しょうれい}しています。すでに海外で多くの赤ちゃんが接種してその効果と安全性が確かめられています。

ロタウイルスワクチンは、ロタウイルスの病原性を弱めてつくられた経口^{けいこう}生ワクチン^{なま}で、甘いシロップ状です。ワクチンは、チューブ式の小さな容器に1回分が入っているので、それを赤ちゃんに飲ませて接種します。ワクチンを接種すると、赤ちゃんのおなかの中でロタウイルスに対する免疫^{めんえき}がつけられます。そのため、ロタウイルスに感染しても胃腸炎を発症しない、または発症しても点滴や入院が必要になるほどの重症な症状をほとんど抑えられることが確かめられています。また、胃腸炎を起こすロタウイルスには年や地域で流行^{りゅうこう}がありますが、免疫^{めんえき}がつけると、流行のタイプに関係なく赤ちゃんがロタウイルスから守られることも確かめられています。

ロタウイルスワクチンは任意接種ワクチンです。任意接種ワクチンは、国や自治体が乳幼児に接種を強くすすめている定期接種ワクチンとは異なり、接種するかどうかは、接種を受ける側（赤ちゃんなら保護者）に任されています。また健康保険は適用されないので、接種費用は自己負担となります。現在、当院で扱っているロタウイルスワクチン（商品名：ロタリックス）は生後6週から接種することができます。初回接種後、少なくとも4週間の間隔をおいて2回目の接種をします。遅くとも生後24週までには2回の接種を完了させなければなりません。

任意接種の費用は、安い金額ではありませんが（当院では1回15,000円＋消費税）、接種を受けずに感染症にかかり、重症化した場合には、それ以上に大きな金銭的負担がかかります。お父さん、お母さんの心配が増え、精神的な負担もかかります。かかりつけ医とよく相談して、接種するかどうかを決めてください。

